

アクティブシニアのボランティア活動参加と社会問題への関心:福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から5

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2018-09-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 塚本, 利幸, 舟木, 紳介, 橋本, 直子, 永井, 裕子 メールアドレス: 所属:
URL	https://fpu.repo.nii.ac.jp/records/49

[研究論文]

アクティブシニアのボランティア活動参加と社会問題への関心

— 福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から 5 —

塚本 利幸・舟木 紳介・橋本 直子・永井 裕子

1. はじめに

ボランティア活動の定義は論者によって様々であるが、ミニマムの条件として、1) 自発性、2) 無償性 (非営利性)、3) 公共性 (公益性) の3点を満たしていなければならないという考え方が一般的である。

公共性 (公益性) とは、人のため、社会のため、になることであり、既存の制度のみでは充足できない問題や制度の狭間にある問題など、自分の生活する社会における課題の解決を指向しているかどうか、ボランティア活動と呼べるかどうかの指標の一つとなる。社会的な課題への対応という意味で、ボランティア活動は社会問題と密接な関係にある。

このためボランティア活動参加の促進をテーマとした論考においても、社会問題への気付きや関心が重要な要因として指摘されてきている。ボランティア活動参加に関する実証的な研究では、参加の理由や動機を尋ねているものが散見され、その多くで「地域・社会への貢献」といった、地域の社会的課題への対応を志向した項目が第1位を占めている。

一方、社会問題への関心の程度や態度が、どのようにボランティア活動参加に影響しているかを、個票レベルのデータを用いて分析している先行研究は少ない。

アクティブシニアという用語は団塊の世代が定年退職を迎え始めた2007頃から使われだされたもので、自分なりの価値観をもった元気な高齢世代であり、年齢に関係なく仕事や趣味に意欲的で、社会に対してもアクティブに行動するシニアのことを指す。総務省の『平成22年度情報通信白書』(2010) や『ICT超高齢社会構想会議報告書』(2013) では、ICT (情報通信技術) の積極的な利用によって、アクティブシニアが蓄積した知識・経験を生かして、地域づくりなどへの社会活動やボランティア活動の担い手として活躍することの重要性が指摘されている。本稿では60歳以上のシニア層のうち市民活動やボランティア活動に関心を持ち、参加の意向を有しているものや、実際にそうした活動の担い手として活動しているものをアクティブシニアと定義する。

受付日 2018.4.27

受理日 2018.6.20

所 属 看護福祉学部

以下では、福井県立大学ボランティア研究会が実施したアンケート調査のデータを用いて、社会問題への関心の程度、社会に対する関わり方・考え方などと、シニア層のボランティア活動への参加経験や参加の意向との関係について分析をおこない、社会問題への関心という側面からアクティブシニアの特徴を明らかにしていきたい¹⁾。

2. アンケート調査の概要と研究方法

福井県はボランティア活動が盛んで、「平成18年社会生活基本調査」によれば、福井県の行動者率（過去1年間に何らかの「ボランティア活動」を行ったものが10歳以上人口に占める割合）は33.6%で、全国平均の26.2%を大幅に上回り、全国第4位となっている²⁾。

福井県立大学ボランティア研究会では、高齢者のボランティア活動参加の実態を明らかにする目的で、60歳から80歳までの福井県在住の一般住民から無作為抽出³⁾した2000人を対象に「ボランティア・市民活動（NPOなど）に関するアンケート」を郵送法で、2013年6月に実施した⁴⁾。

有効回収数は949件（回収率47.5%）であった。回答者の基本属性（性別と年代）は表1の通りである。

この調査データを、統計的な手法（クロス集計とカイ2乗検定、順位相関係数、因子分析、クラスター分析など）を用いて、分析する。

表1 回答者の基本属性

項目	カテゴリ	%
性別 (n=936)	男性	49.9
	女性	50.1
年齢 (n=937)	60～64歳	30.2
	65～69歳	25.3
	70～74歳	20.7
	75～80歳	23.8

3. 倫理的配慮

アンケート調査の実施にあたっては、インフォームド・コンセントに留意するとともに、無記名式でおこなった。分析および分析結果の公表に際しては、全体として集計し、統計的手法を用いた処理をおこない、個人の回答内容が特定されることのない手法を採用する。

4. 分析結果

(1) 社会問題への関心の程度との関係

調査では、社会問題への関心の程度について、「非常に関心がある」から「まったく関心がない」までの4段階で尋ねている。

ボランティア活動への参加経験との関係を分析したものが図1-1である⁵⁾。過去1年間のボランティア活動の参加率についてみると、「非常に関心がある」と回答したもので50.0%、以下、「ある程度関心がある」で35.2%、「あまり関心がない」で12.2%、「まったく関心がない」で0.0%

アクティブシニアのボランティア活動参加と社会問題への関心

と逡減していく。有意水準も1%以下であり、社会問題への関心が高いものほどボランティア活動への参加率も高いという関係が明瞭に表れている。

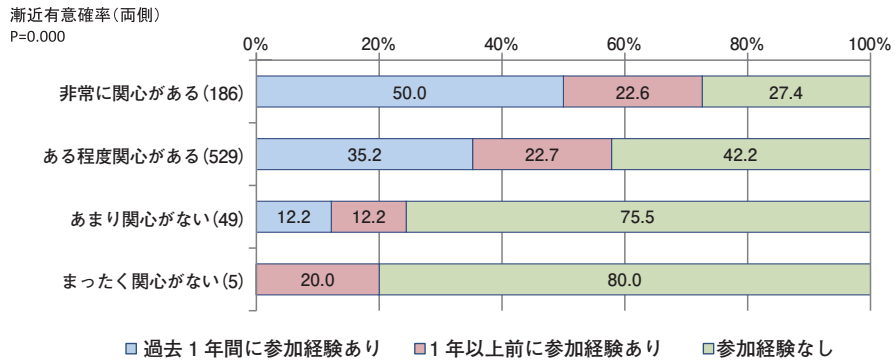


図1-1 社会問題への関心の程度 × ボランティア活動の参加経験

ボランティア活動への今後の参加の意向との関係についても(図1-2)、同様の傾向が明瞭なかたちで示されており(有意水準1%以下)、関心が低下するにしたがって、参加を希望するものの割合が、76.3%、50.7%、12.2%、0.0%と逡減していく⁶⁾。

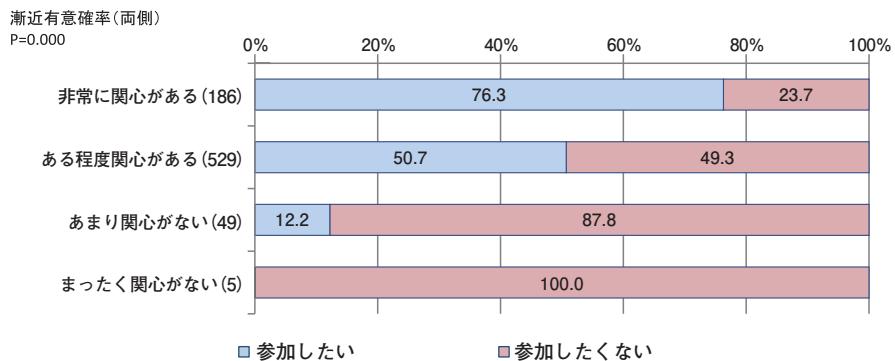


図1-2 社会問題への関心 × ボランティア活動への参加の意向

社会問題への関心程度と、ボランティア活動への参加経験、参加希望の間には強い結びつきがあることが確認された。

(2) 社会状況に対する満足度、日本の向かっている方向への評価との関係

現在の社会状況全般への満足度とボランティア活動の参加経験の関係についてみると(図2-1)、「満足している」と回答したもので、過去1年間に参加経験をもつものの割合が18.8%と最低になっているが、統計学的にみて有意な差ではない⁷⁾。

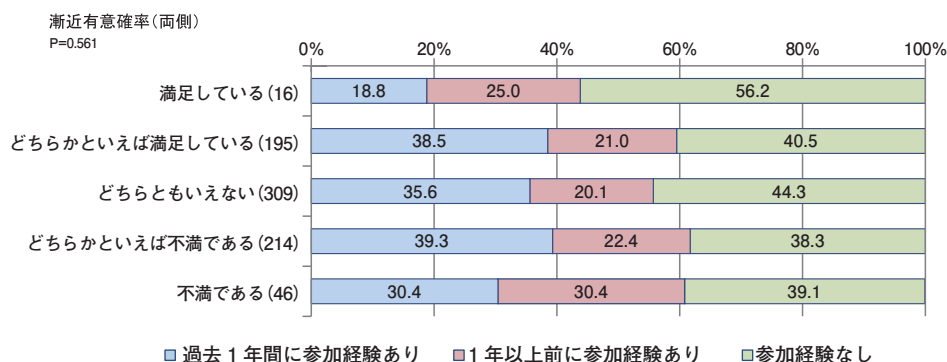


図2-1 社会状況への満足度 × ボランティア活動の参加経験

ボランティア活動への今後の参加の意向との関係についてみると(図2-2)、5%水準で有意な差が確認されるが、満足度に比例して参加の意向が強まったり、弱まったりするような線形的な関係性は見られない。「どちらともいえない」という中間的な評価をしているグループで、47.2%と参加の意向を示すものの割合が相対的に低くなっている⁸⁾。

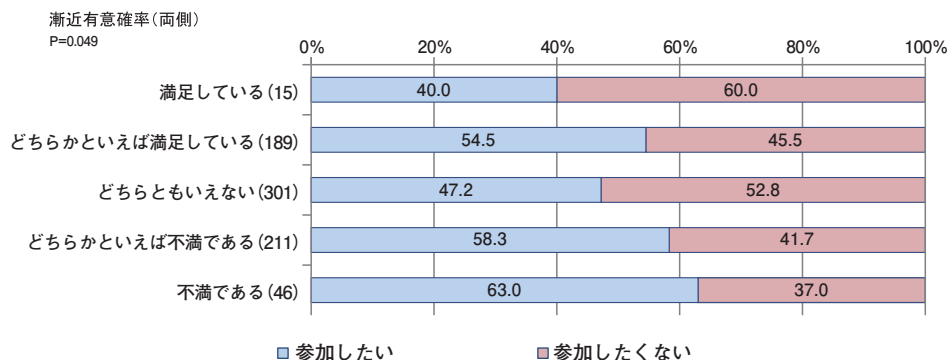


図2-2 社会状況への満足度 × ボランティア活動への参加の意向

日本の向かっている方向への全体的な評価とボランティア活動への参加経験との関係についてみると(図3-1)、「良い方向へ向かっている」と最も肯定的な評価をしているもので、参加経験なしの割合が72.7%と最も高く、他の評価をしているものの2倍近くになっている。日本の未来に関して、楽観的な展望を持っているものは、自らが問題解決ために汗を流す必要を感じていないためであると考えられる⁹⁾。

アクティブシニアのボランティア活動参加と社会問題への関心

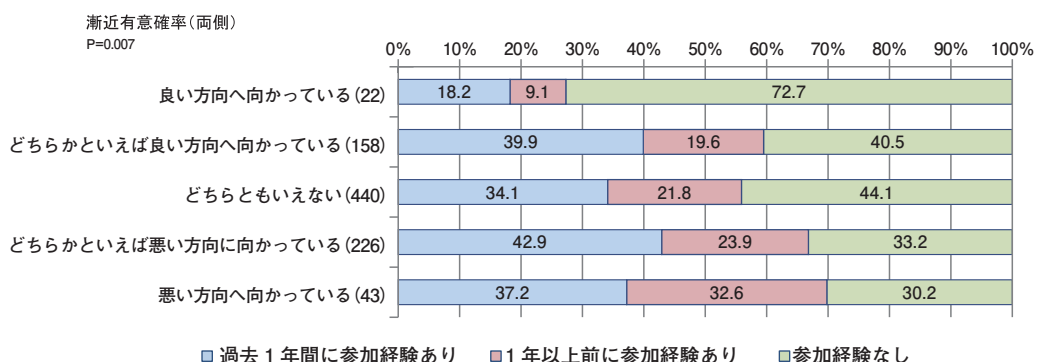


図3-1 日本の向かっている方向への評価 × ボランティア活動の参加経験

ボランティア活動への参加の意向との関係についてみると(図3-2)、「良い方向へ向かっている」と回答したもので、参加を希望するものの割合が42.9%と最も低い。次に低いのが「どちらかといえば良い方向へ向かっている」の46.7%で、この2つの回答で参加希望者が5割を切る。その他の回答では参加を希望するものが6割を超えており、コントラストをなしている¹⁰⁾。

「どちらともいいない」で相対的に参加希望者が少なく、「どちらかといえば悪い方向へ向かっている」で相対的に参加希望者が多くなっており、将来展望が楽観的であれば不参加、悲観的であれば参加、の傾向が強まるといった単純な関係ではない。例えば、自ら行動することで、どの程度、状況を改善することが可能であるかについての評価(対処有効性評価)などの要因も、影響している可能性が考えられる。今後の研究課題としたい。

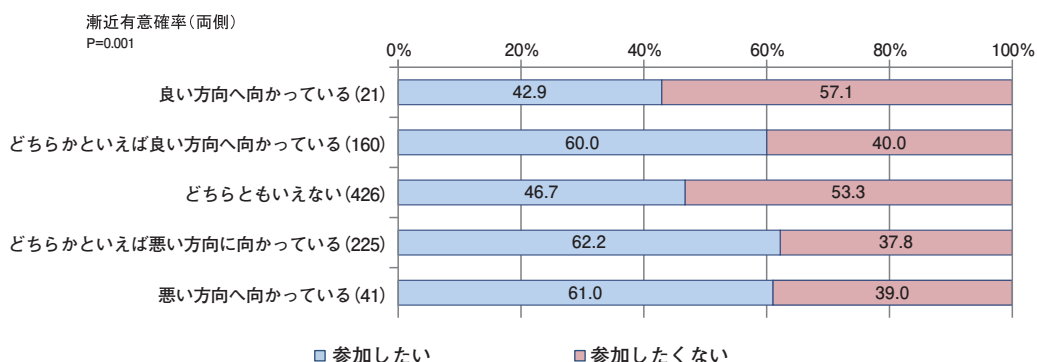


図3-2 日本の向かっている方向への評価 × ボランティア活動への参加の意向

(3) 社会に対する関わり方、考え方との関係

調査では、社会に対する関わり方、考え方について11の項目を尋ね、「そう思う」から「そう思わない」の5段階で回答してもらっている。以下では、それぞれの質問項目と、ボランティア活動への参加経験・参加の意向の関係についてみていきたい。

1) 質問項目への回答と参加経験、参加希望の関係

質問1：自分のことに精一杯で、他人のことを考えるだけの余裕はない

この質問項目と参加経験、参加希望の関係についてみると(図4-1、図4-2)、「そう思わない」ものほど、参加経験者の割合が高く、今後の参加についても希望するものの割合が高いという傾向(線形的な結びつき)が明瞭にみてとれる(いずれも1%水準で有意)^{11) 12)}。

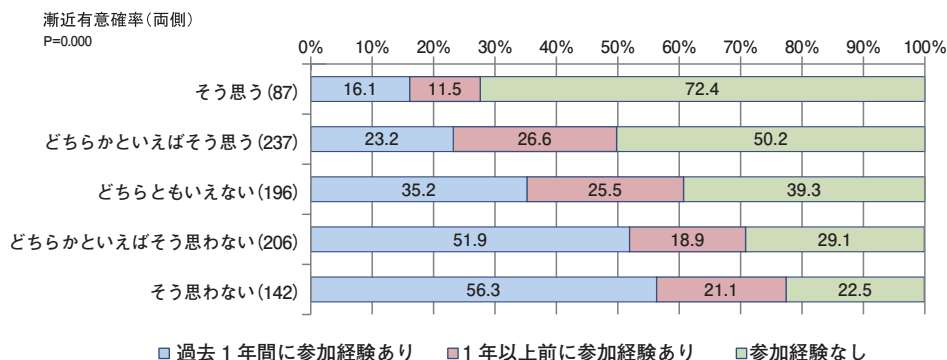


図4-1 自分のことに精一杯で、他人のことを考えるだけの余裕はない × ボランティア活動の参加経験

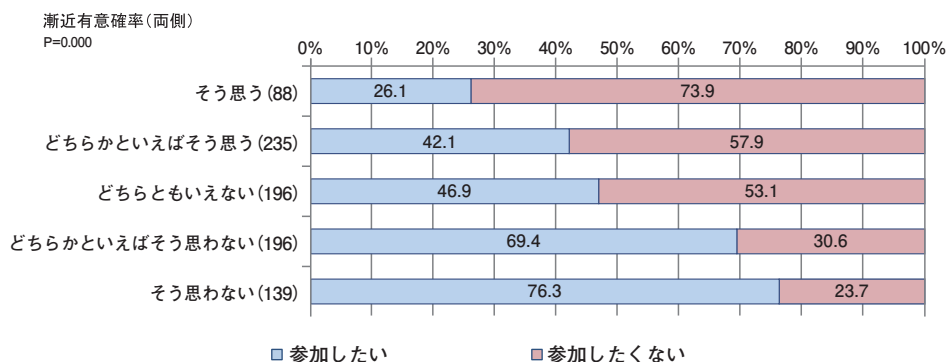


図4-2 自分のことに精一杯で、他人のことを考えるだけの余裕はない × ボランティア活動への参加の意向

質問2：自分一人が努力しても世の中はよくならない

この質問項目と参加経験、参加希望の関係についてみると(図5-1、図5-2)、「そう思わない」もののほど、参加経験者の割合が高く、今後の参加についても希望するものの割合が高いという傾向(線形的な結びつき)が明瞭にみてとれる(いずれも1%水準で有意)^{13) 14)}。

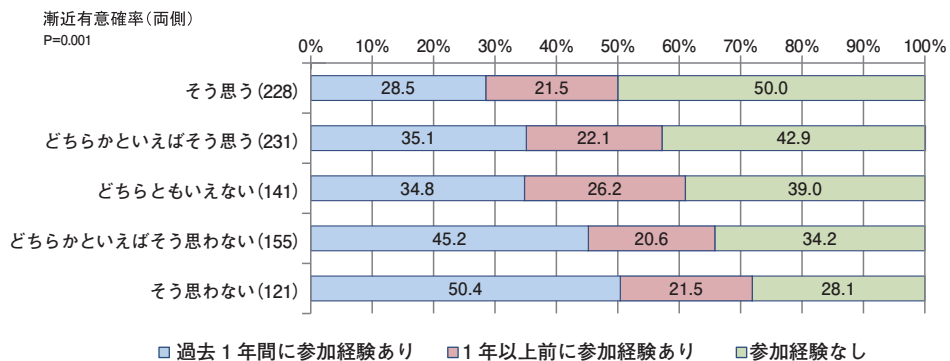


図5-1 自分一人が努力しても世の中はよくならない×ボランティア活動の参加経験

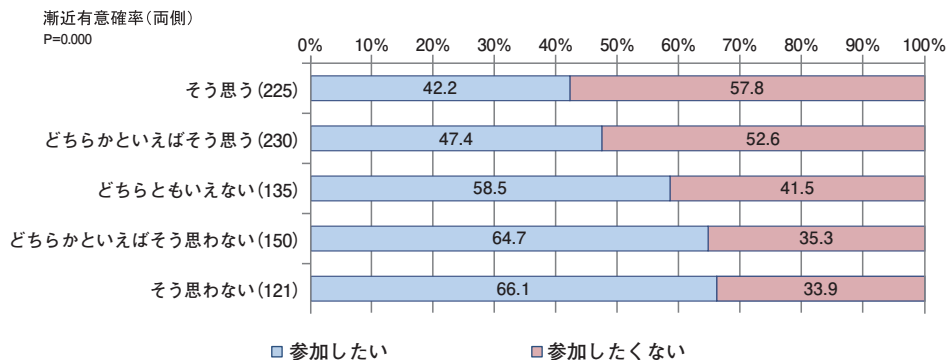


図5-2 自分一人が努力しても世の中はよくならない×ボランティア活動の参加の意向

質問3: 社会問題は自分の生活とはまったく関係のないことだと思う

この質問項目と参加経験の関係についてみると(図6-1)、「そう思わない」ものほど、参加経験者の割合が高いという傾向(線形的な結びつき)が明瞭にみてとれる(1%水準で有意)¹⁵⁾。今後の参加については(図6-2)、「どちらかといえばそう思う」と「どちらともいえない」の間に順番の入れ替わりがみられるものの、基本的には「そう思わない」ものほど、参加を希望するものの割合が高いという傾向が確認できる(1%水準で有意)¹⁶⁾。

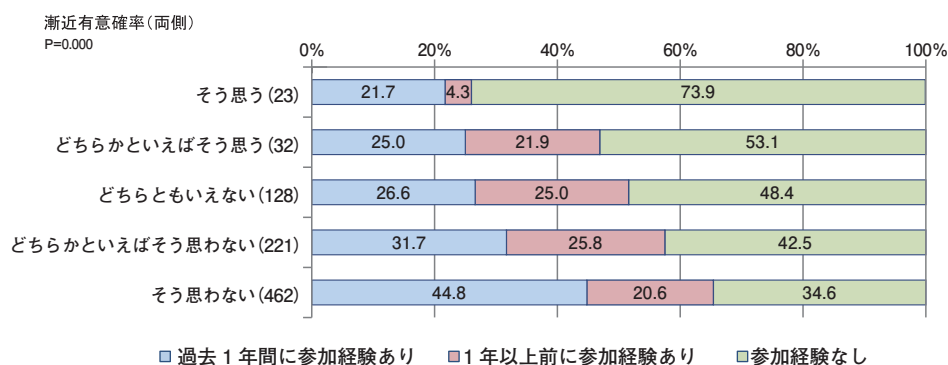


図6-1 社会問題は自分の生活とはまったく関係のないことだと思う × ボランティア活動の参加経験

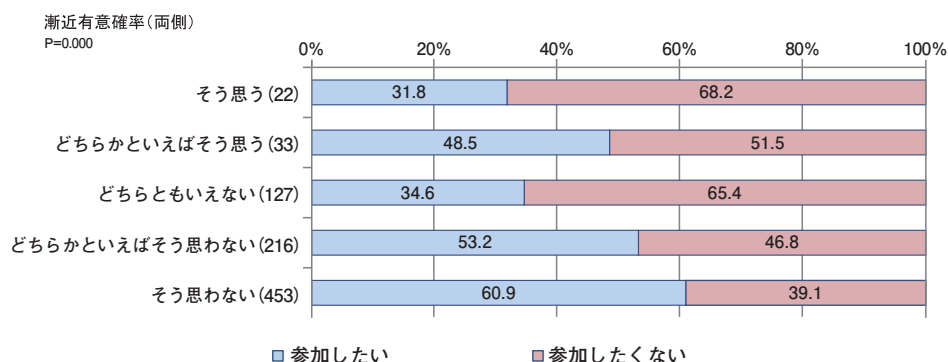


図6-2 社会問題は自分の生活とはまったく関係のないことだと思う × ボランティア活動への参加の意向

質問4：政治や社会問題などの難しい問題を考えるのはめんどうである

この質問項目と参加経験、参加希望の関係についてみると(図7-1、図7-2)、「そう思わない」もののほど、参加経験者の割合が高く、今後の参加についても希望するものの割合が高いという傾向(線形的な結びつき)が明瞭にみてとれる(いずれも1%水準で有意)^{17) 18)}。

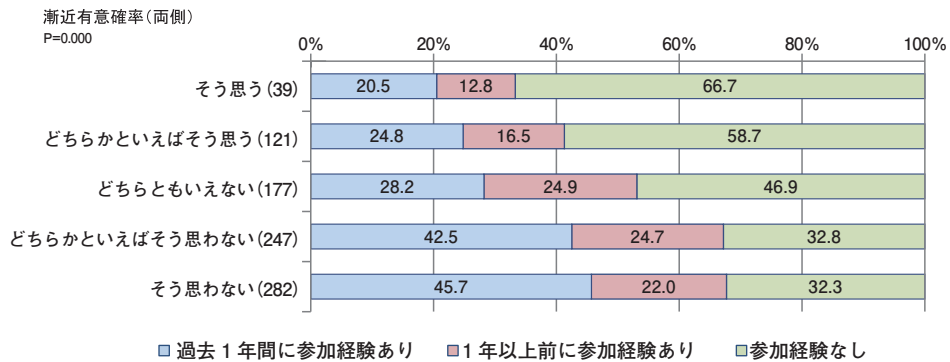


図7-1 政治や社会問題などの難しい問題を考えるのはめんどうである × ボランティア活動の参加経験

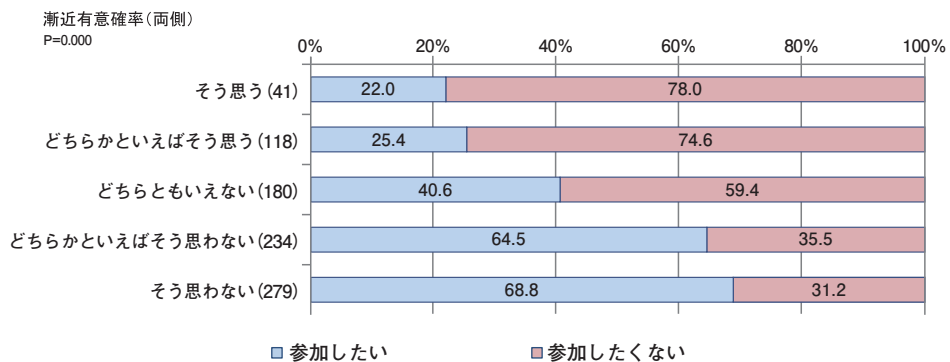


図7-2 政治や社会問題などの難しい問題を考えるのはめんどうである × ボランティア活動への参加の意向

質問5: 他人のことで自分の時間をとられたくない

この質問項目と参加経験、参加希望の関係についてみると(図8-1、図8-2)、「そう思わない」もののほど、参加経験者の割合が高く、今後の参加についても希望するものの割合が高いという傾向(線形的な結びつき)が明瞭にみてとれる(いずれも1%水準で有意)^{19) 20)}。

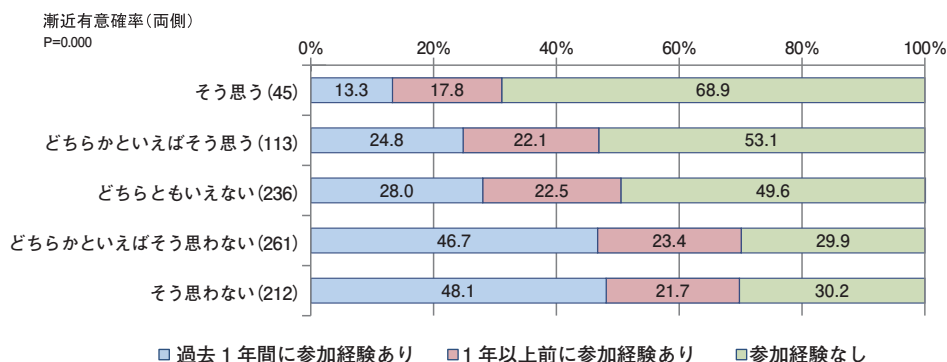


図8-1 他人のことで自分の時間をとられたくない×ボランティア活動の参加経験

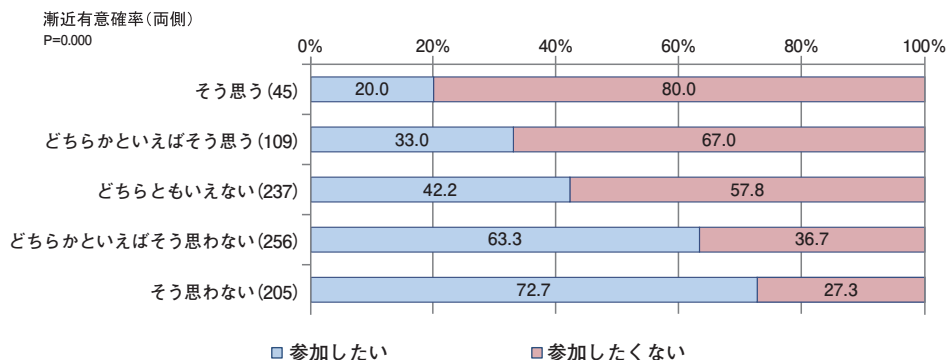


図8-2 他人のことで自分の時間をとられたくない×ボランティア活動への参加の意向

質問6：自分が損をしてまで、皆のためにつくすのはバカげている

この質問項目と参加経験、参加希望の関係についてみると(図9-1、図9-2)、「そう思わない」もののほど、参加経験者の割合が高く、今後の参加についても希望するものの割合が高いという傾向(線形的な結びつき)が明瞭にみてとれる(いずれも1%水準で有意)^{21) 22)}。

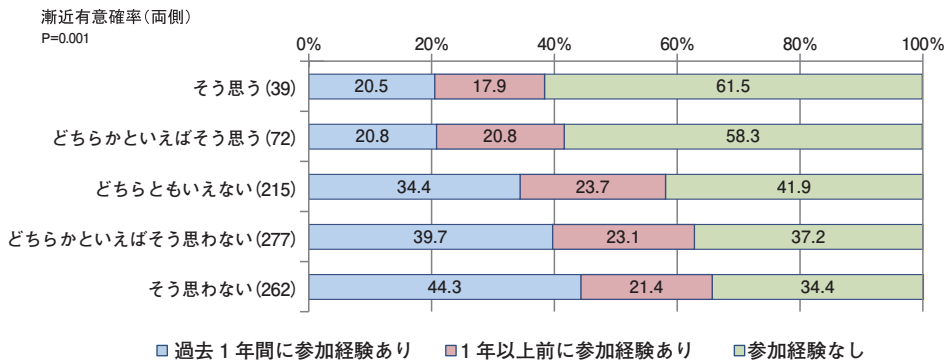


図9-1 自分が損をしてまで、皆のためにつくすのはバカげている × ボランティア活動の参加経験

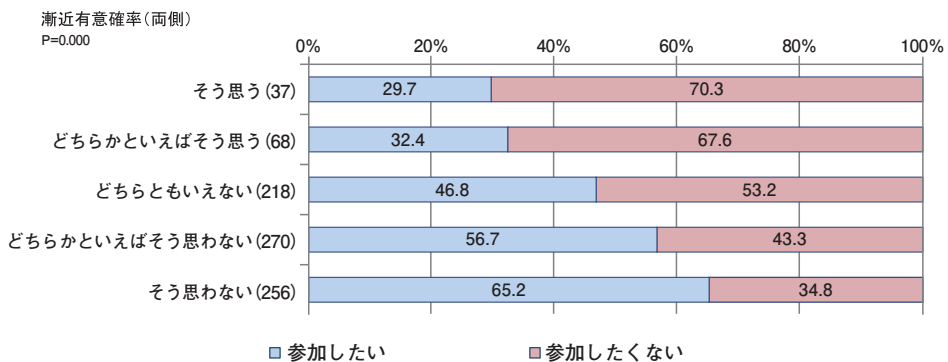


図9-2 自分が損をしてまで、皆のためにつくすのはバカげている × ボランティア活動への参加の意向

質問7: 福祉が多少低下することになってもわれわれの負担は軽くして欲しい

この質問項目と参加経験、参加希望の関係についてみると(図10-1、図10-2)、「そう思わない」ものほど、参加経験者の割合が高く、今後の参加についても希望するものの割合が高いという傾向(線形的な結びつき)が明瞭にみとれる(いずれも1%水準で有意)^{23) 24)}。

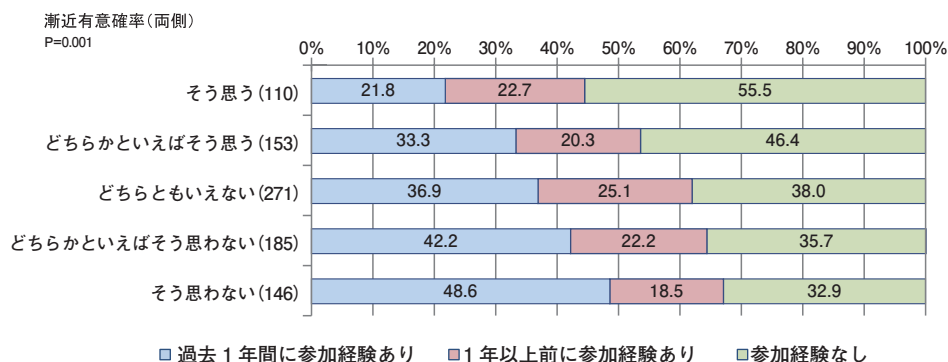


図 10-1 福祉が多少低下することになってもわれわれの負担は軽くして欲しい × ボランティア活動の参加経験

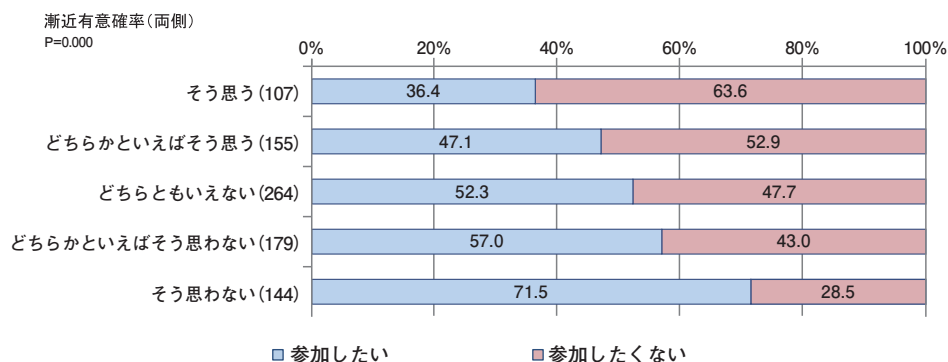


図 10-2 福祉が多少低下することになってもわれわれの負担は軽くして欲しい × ボランティア活動への参加の意向

質問8: 弱い立場の人びとを支援することがもっと必要だと思う

この質問項目と参加経験の関係についてみると(図11-1)、質問に対する同意の程度と参加経験の割合の間に有意な結びつきが確認できない²⁵⁾。今後の参加希望に関しては(図11-2)、5%水準で有意な結びつきがみられる²⁶⁾。「そう思わない」ものの73.0%が参加を希望しており、割合が最も高い。参加希望の割合が最も低いのは、「どちらともいえない」の46.0%となっている。質問への同意の程度と参加希望者の割合の関係は、同意の程度が高くなるほど参加希望者が増加または減少するといった単純な線形関係とはなっていない。

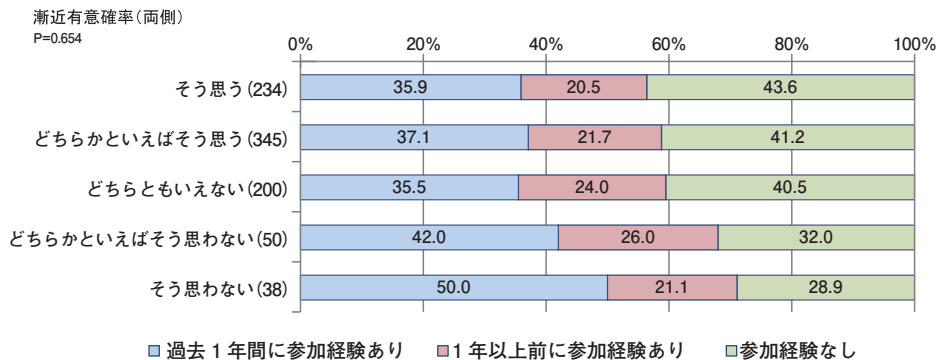


図11-1 弱い立場の人を支援することがもっと必要だと思う × ボランティア活動の参加経験

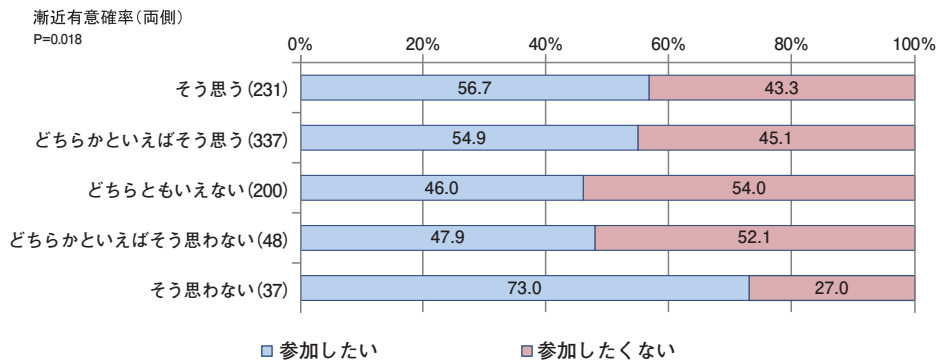


図11-2 弱い立場の人を支援することがもっと必要だと思う × ボランティア活動への参加の意向

質問9: 格差が多少広がっても、自由に競争できる社会にすることが、もっと必要だと思う

この質問項目と参加経験、参加希望の関係についてみると(図12-1、図12-2)、参加経験との間には5%水準の結びつきが確認できる²⁷⁾。「そう思う」と回答したもので、過去1年間の参加経験者の割合が19.3%と極端に低くなっている。一方、他の回答を選択したものの間には、顕著な違いがみられない。今後の参加希望に関しては、有意な結びつきは確認できない²⁸⁾。

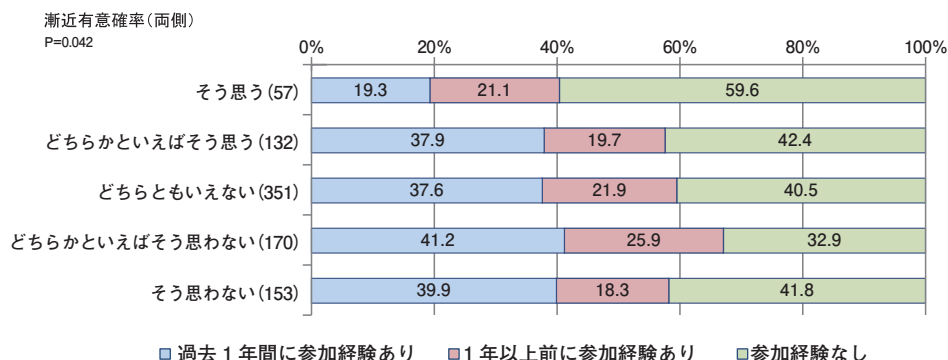


図12-1 格差が多少広がっても、自由に競争できる社会にすることが、もっと必要だと思う × ボランティア活動の参加経験

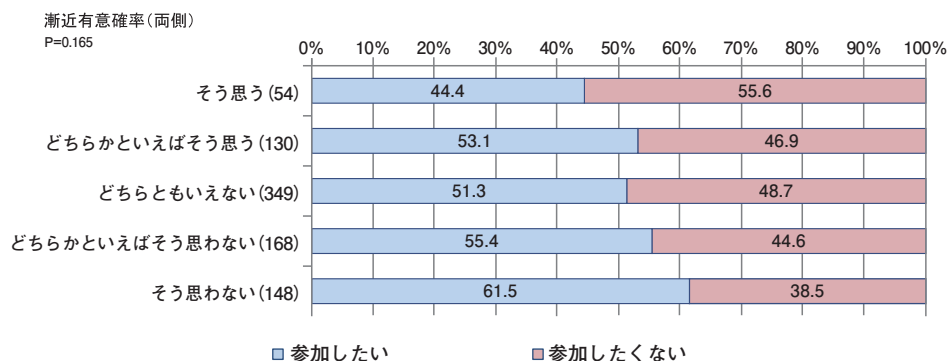


図12-2 格差が多少広がっても、自由に競争できる社会にすることが、もっと必要だと思う × ボランティア活動への参加の意向

質問10：世の中をよくするためには、みんなが力を合わせ、汗をかくことが重要である

この質問項目と参加経験、参加希望の関係についてみると（図13-1、図13-2）、参加経験との間には有意な結びつきが確認できない²⁹⁾。今後の参加の意向に関しては1%水準で有意な結びつきが確認できるが、質問への同意の程度と参加希望者の割合の結びつきは、単純な線形関係とはなっていない³⁰⁾。

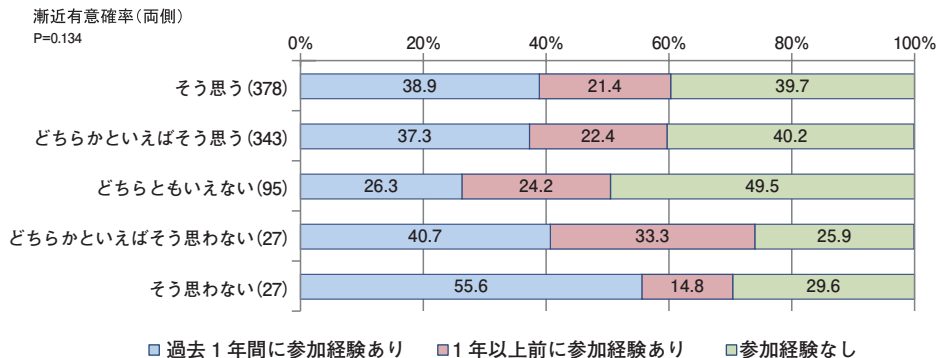


図13-1 世の中をよくするためには、みんなが力を合わせ、汗をかくことが重要である × ボランティア活動の参加経験

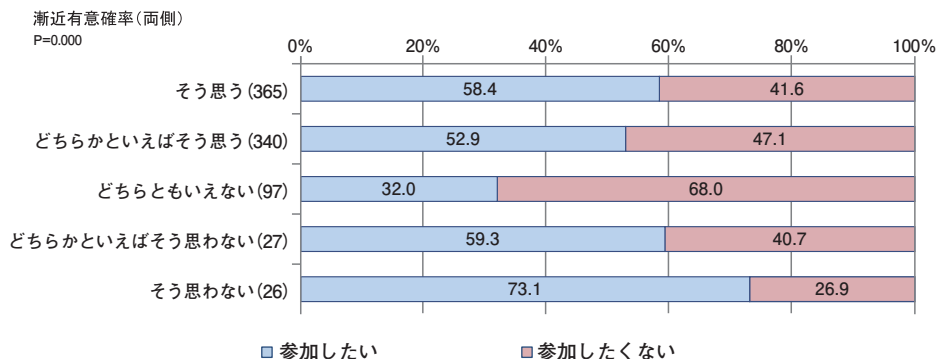


図13-2 世の中をよくするためには、みんなが力を合わせ、汗をかくことが重要である × ボランティア活動への参加の意向

質問11：全体的にみて、現在の日本社会には、差別や不平等があると思う

この質問項目と参加経験、参加希望の関係についてみると（図14-1、図14-2）、参加経験との間にも、参加の意向との間にも、有意な結びつきは確認できない^{31) 32)}。

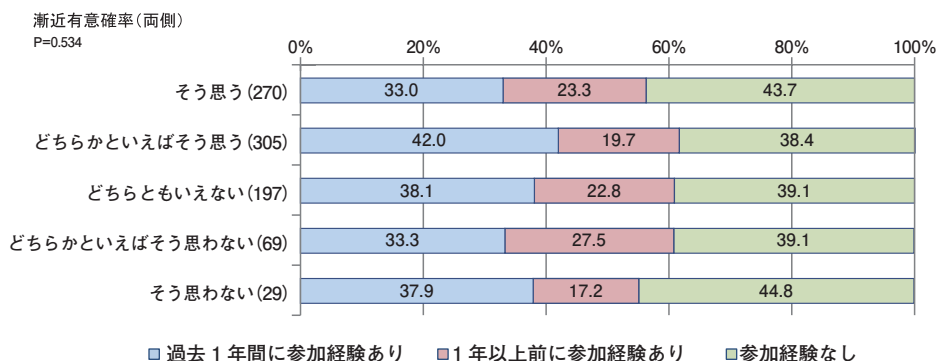


図14-1 全体的にみて、現在の日本社会には、差別や不平等があると思う × ボランティア活動の参加経験

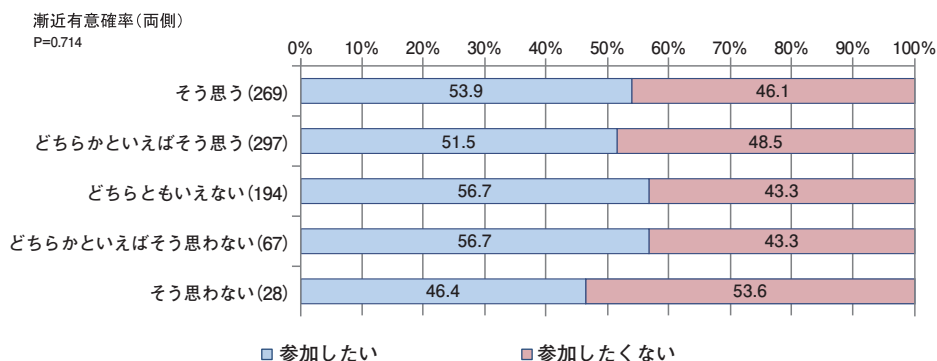


図14-2 全体的にみて、現在の日本社会には、差別や不平等があると思う × ボランティア活動への参加の意向

2) 社会に対する関わり方、考え方に関する多変量分析

11の質問項目と、ボランティア活動への参加経験、参加希望の結びつきは一樣ではなく、明瞭に線形的な結びつきがみられる項目、結びつきはみられるが線形関係ではない項目、結びつきがみられない項目、に別れる。

質問項目をより少数の要素に縮約するために因子分析をおこなった。その結果をまとめたものが表2-1である。

表2-1 社会に関する関わり方、考え方に関する因子分析結果

項 目	因子負荷量		
	因子 1 利己的傾向性	因子 2 ミクロ・マクロ・リンク	因子 3 社会問題認知
自分のことに精一杯で、他人のことを考えるだけの余裕はない	0.557	- 0.085	0.067
自分一人が努力しても世の中はよくならない	0.522	0.054	0.181
政治や社会問題などの難しい問題を考えるのはめんどうである	0.474	- 0.231	- 0.027
他人のことで自分の時間をとられたくない	0.833	0.096	- 0.107
自分が損をしてまで、皆のためにつくすのはバカげている	0.712	0.017	- 0.102
福祉が多少低下することになってもわれわれの負担は軽くして欲しい	0.486	- 0.021	0.105
格差が多少広がっても、自由に競争できる社会にすることが、もっと必要だと思う	0.272	0.020	0.014
社会問題は自分の生活とはまったく関係のないことだと思う	- 0.036	0.980	- 0.004
弱い立場の人を支援することがもっと必要だと思う	0.081	0.062	0.529
世の中をよくするためには、みんなが力を合わせ、汗をかくことが重要である	- 0.052	- 0.032	0.472
全体的にみて、現在の日本社会には、差別や不平等があると思う	0.058	- 0.041	0.315
累積寄与率 (%)	30.390	43.405	52.995

注1) 因子抽出法: 最尤法

注2) 回転法: プロマックス法

因子1は、「自分のことに精一杯で、他人のことを考えるだけの余裕がない」、「自分一人が努力しても世の中はよくならない」、「政治や社会問題などの難しい問題を考えるのはめんどうである」、「他人のことで自分の時間をとられたくない」、「自分が損をしてまで、皆のためにつくすのはバカげている」、「福祉が多少低下することになってもわれわれの負担は軽くして欲しい」、「格差が多少広がっても、自由に競争できる社会にすることが、もっと必要だと思う」の7つの質問項目と大きな正の相関を示し、「利己的傾向性」をあらわしていると解釈できる。

因子2は、「社会問題は自分の生活とはまったく関係のないことだと思う」という質問項目1

つとのみ大きな正の相関を示す。社会問題と自分の生活を結びつけてインスピレーションできるかどうかに関わる因子であると解釈できる。構造的なマクロ状況と私的なミクロ状況をリンクする要因なので、「ミクロ・マクロ・リンク」と名付ける。

因子3は、「弱い立場の人を支援することがもっと必要だと思う」、「世の中をよくするためには、みんなが力を合わせ、汗をかくことが重要である」、「全体的にみて、現在の日本社会には、差別や不平等があると思う」の3つの質問項目と大きな正の相関を示す。インパーソナルなマクロ状況としての社会問題の認知に関わる因子であると解釈できるため、「社会問題認知」と呼ぶことにしたい。

上記3つの因子の相関関係を確かめたものが表2-2である。相関係数として、spearmanの順位相関係数を算出し、1%水準で有意な相関に網掛けがしてある。

表2-2 因子間の相関係数

		因子2 ミクロ・マクロ・リンク	因子3 社会問題認知
因子1 利己的傾向性	相関係数	-0.196	-0.017
	有意確率(両側)	0.000	0.625
	度数	853	853
因子2 マクロ・ミクロ・リンク	相関係数		0.105
	有意確率(両側)		0.002
	度数		853

利己的傾向性とマクロ・ミクロ・リンクの間に負の相関が、マクロ・ミクロ・リンクと社会問題認知の間に正の相関が確認できるが、利己的傾向性と社会問題認知の間には有意な相関は確認できない。

社会問題と自分の生活を結びつけてインスピレーションできるものほど、利己的な傾向性が低く、社会問題の存在をよく認知していることがわかる。社会問題の存在を認知しているだけでは、利己的な傾向性が抑制されるとは限らない。世の中に差別や不平等が存在し、社会的弱者のために、みんなが協力する必要ある、という認知は、そうした状況を自分の生活に結びつける想像力が働かない限り、利他的な行動とは結びつきにくい、ことが理解できる。

3つの因子の得点を用いて、クラスター分析(Ward法)をおこない、回答者を4つのクラスターに区分した。クラスターごとに3因子の平均得点を算出し、偏差値についてまとめたものが図15である。

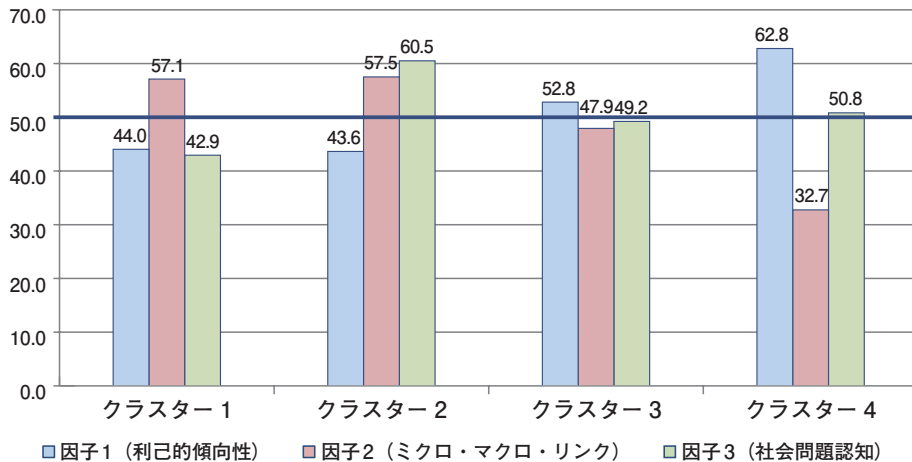


図 15 クラスターごとの因子得点の偏差値

クラスター 1 は、利己的傾向性が弱く、ミクロ・マクロ・リンクが機能しているが、社会問題の認知度は低い。クラスター 2 は、利己的傾向性が弱く、ミクロ・マクロ・リンクが機能しており、社会問題の認知度も高い。クラスター 3 は、利己的傾向性がやや強く、ミクロ・マクロ・リンクと社会問題の認知がやや低い、どの因子の得点も平均的である。クラスター 4 は、利己的傾向性が強く、ミクロ・マクロ・リンクが機能しておらず、社会問題の認知は平均的である。

クラスターごとのボランティア活動への参加経験、参加希望についてまとめたものが図 16-1、図 16-2 である^{33) 34)}。全般的な状況との比較のために、全体の分布も示してある。参加経験者、参加希望者の割合とも、クラスター 1、クラスター 2 が高く、クラスター間でほとんど違いがみられない。ミクロ・マクロ・リンクが機能し、利己的傾向性が弱ければ、社会問題の認知度に関わらず、ボランティア活動への取り組みが積極化するという傾向が確認できる。一方、ミクロ・マクロ・リンクが機能せず、利己的傾向性が強いクラスター 4 は、社会問題の認知度がクラスター 1 より高いにも関わらず、参加経験者、参加希望者の割合とも、最低となっている。すべての因子得点が平均的なクラスター 3 が、両者の中間に位置し、全体の分布に近い傾向を示している。

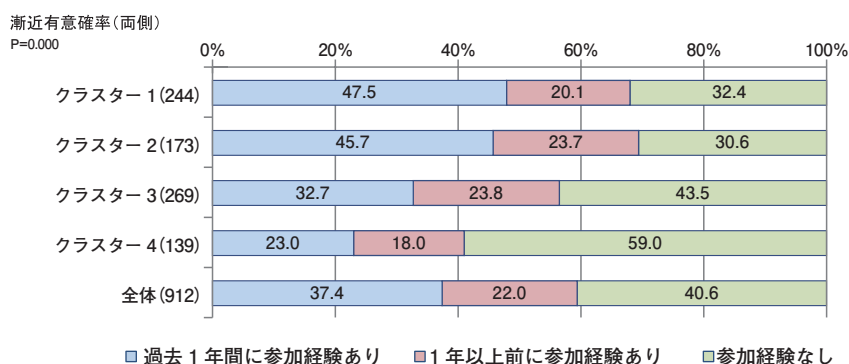


図 16-1 クラスター × ボランティア活動の参加経験

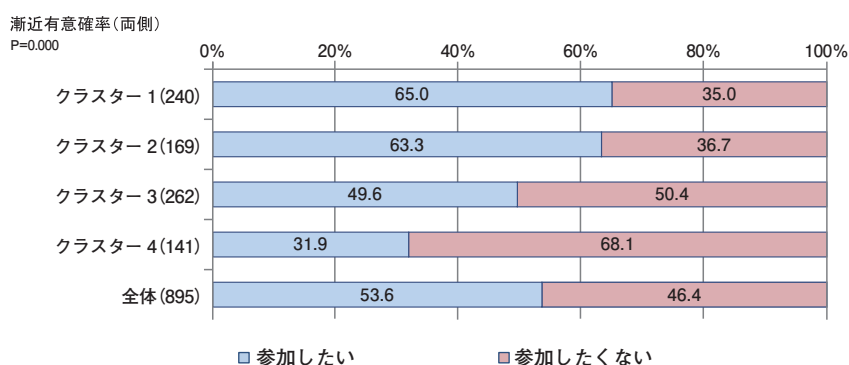


図 16-2 クラスター × ボランティア活動への参加の意向

クラスターごとの因子得点とボランティア活動への参加経験・参加希望の状況についてまとめたものが表2-3である。1) 因子3「社会問題の認知」は、参加経験・参加希望の程度にほとんど影響しないこと、2) 因子1「利己的傾向性」と因子2「ミクロ・マクロ・リンク」は、反比例の関係にあること、3) 因子1「利己的傾向性」と因子2「ミクロ・マクロ・リンク」のセットによって、参加経験・参加希望の程度が説明可能なこと、が分かる。

表2-3 クラスターごとの因子得点とボランティア活動への参加経験・参加希望

	因子1 利己的傾向性	因子2 ミクロ・マクロ・リンク	因子3 社会問題認知	ボランティア活動への 参加経験・参加希望
クラスター1	低	高	低	高
クラスター2	低	高	高	高
クラスター3	並	並	並	並
クラスター4	高	低	並	低

3) 社会に対する関わり方、考え方にかかわる因子と他の要因の関係

「塚本・舟木・橋本・永井(2017)」では、ボランティア活動参加と社会関係資本の関係について検討し、1)「他者への信頼」のような認知的な要因より、具体的な「社会的ネットワークへの包摂」の程度の方が、ボランティア活動への参加経験や参加の意向との結びつきが強いことを確認し、2) 社会的なネットワークがボランティア活動に関する情報の流通経路として機能し、身近な存在からの勧誘が、ボランティア活動への一步を踏み出す際の敷居を下げる働きをしている可能性について指摘した。

表2-4、表2-5は、社会関係資本に関連する質問項目の因子分析の結果である。

表2-4 地域社会とのネットワーク、近隣などとの互酬関係の因子分析

項 目	因子負荷量	
	因子 1 ネットワーク因子	因子 2 特定化互酬性因子
自治会(町内会)行事への参加の程度	0.654	- 0.029
公民館活動への参加の程度	0.745	- 0.087
加入している団体の種類	0.494	0.123
近所付き合いの程度	0.366	0.290
近所の方に支えられた(助けられた)経験の種類	0.006	0.686
不自由になったときに近所の方にして欲しいことの種類	- 0.100	0.705
近所の困っている世帯に対する手伝いの程度	0.173	0.269
自宅に招いた人の種類	0.225	0.334
累積寄与率(%)	37.833	50.914

注1) 因子抽出法: 最尤法

注2) 回転法: プロマックス法

表2-5 信頼に関する質問項目の因子分析結果

項 目	因子負荷量	
	因子 1	因子 2
	ローカルな他者への信頼	一般的な他者への信頼
ご近所の方を信頼できる	0.826	- 0.030
お住まいの地域の人たちを信頼できる	0.934	- 0.055
ほとんどの人は信頼できる	0.342	0.459
ほとんどの人は他人を信頼している	- 0.042	0.680
ほとんどの人は基本的に善良で親切である	- 0.028	0.785
ほとんどの人は人から信頼された場合、 同じようにその相手を信頼する	0.019	0.611
特定の人だけしか信頼できない	- 0.276	- 0.093
累積寄与率 (%)	44.300	62.279

注1) 因子抽出法: 最尤法

注2) 回転法: プロマックス法

社会に対する関わり方・考え方にかかわる因子と社会関係資本にかかわる因子の間の結びつきについてまとめたものが表2-6である。相関係数として、spearmanの順位相関係数を算出し、1%水準で有意な相関に網掛けがしてある。

表2-6 社会に対する関わり方・考え方にかかわる因子と社会関係資本にかかわる因子の間の結びつき

	ネットワーク	特定化互酬性	ローカルな他者 への信頼	一般的な他者 への信頼
相関係数	- 0.278	- 0.296	- 0.207	- 0.184
利己的傾向性	有意確率(両側)	0.000	0.000	0.000
度数	692	692	722	722
相関係数	0.059	0.099	- 0.006	- 0.042
マクロ・ミクロ・ リンク	有意確率(両側)	0.121	0.087	0.257
度数	692	692	722	722
相関係数	0.031	0.061	0.101	0.032
社会問題認知	有意確率(両側)	0.411	0.007	0.395
度数	692	692	722	722

利己的傾向性因子は社会関係資本にかかわるすべての因子と、1%水準で有意な負の相関を示す。地域や近隣との結びつきをもち、他者を信頼しているものほど、利己的な傾向性が少な

いことがわかる。この他にも、特定化互酬性因子とミクロ・マクロ・リンク因子の間、ローカルな他者への信頼因子と社会問題認知因子の間、に1%水準の性の相関が認められるが、spearmanの順位相関係数は、それぞれ0.099、0.101といった小さな値であり、それほど強い結びつきではない。

今回の調査では、健康状態、時間的なゆとり、経済的なゆとり、精神的なゆとり、就学年数といったボランティア活動に参加するに際して、構造的な阻害要因となる可能性の高い項目に関して尋ね、健康状態に関しては、「非常に健康」から「まったく健康でない」までの4段階で、ゆとりに関する項目では、「かなりある」から「まったくない」までの5段階で、就学年数に関しては、具体的な年数で、回答を求めている。

社会に対する関わり方・考え方にかかわる因子との間の結びつきについてまとめたものが表2-7である。相関係数として、spearmanの順位相関係数を算出し、1%水準で有意な相関に網掛けがしてある。

利己的傾向性は、時間的なゆとり以外のすべての項目とマイナスの相関を示す。健康状態が悪く、経済的、精神的なゆとりがなく、就学年数の短いものほど、利己的な傾向性が強くなる蓋然性が高い。その他の項目で、1%水準の相関が確認できるのは、ミクロ・マクロ・リンクと就学年数のペアだけである。就学年数が長いほど、社会状況と自分の生活を結びつけてインスピレーションすることが容易になるのだと解釈することができる。

表2-7 社会に対する関わり方・考え方にかかわる因子と構造的な制約要因の間の結びつき

		健康状態	時間的なゆとり	経済的なゆとり	精神的なゆとり	就学年数
利己的傾向性	相関係数	- 0.169	- 0.047	- 0.203	- 0.263	- 0.139
	有意確率(両側)	0.000	0.198	0.000	0.000	0.000
	度数	818	746	729	729	803
マクロ・ミクロ・リンク	相関係数	- 0.076	0.052	0.058	0.081	0.118
	有意確率(両側)	0.029	0.156	0.112	0.028	0.001
	度数	818	746	740	729	803
社会問題認知	相関係数	- 0.007	- 0.041	- 0.087	0.012	- 0.038
	有意確率(両側)	0.843	0.265	0.018	0.756	0.279
	度数	818	746	740	729	803

ここまで、利己的傾向性というネーミングを使用してきたが、上記の分析からは、健康状態が思わしくなかったり、経済的なゆとりや精神的なゆとりが乏しかったり、就学の機会に恵ま

れなかったりして、社会的なネットワークから孤立しがちなものが、自分のことに精一杯で、他人のことを思いやる余裕を失ったり、他者への信頼が構築しにくくなっているという状況が推察される。

ボランティア活動の活性化に向けて、当然であるかもしれないが、社会的な格差の是正や社会的ネットワークへの包摂といったことが、その前提条件として重要であることが、改めて確認された。

5. まとめ

本稿では、社会問題への関心の程度や社会に対する関わり方、考え方、関心のある社会問題の種別などが、どのようにボランティア活動への参加と関わっているかを分析してきた。その結果、1) 社会問題への関心の程度が高いほど、ボランティア活動への参加が促進されること、2) 利己的傾向性が低く、ミクロ・マクロ・リンクが機能しているものほど、ボランティア活動に活発に参加していること、3) 社会問題認知の程度は、それ自体としては、ボランティア活動参加にほとんど影響しないこと、4) ボランティア活動の活性化に向けた前提条件として、社会的な格差の是正や社会的なネットワークへの包摂が重要であること、などが確認された。

ボランティア活動を促進していくためには、社会問題への関心を喚起していくことが有効であるが、単に問題の所在を指摘し、認識を広めるだけでは効果的とはいえない。そうした問題と自分の生活を結び付けて発想する想像力を涵養していくことが重要である。社会問題に直面している当事者と直接交流してもらったり、ロールプレイなどを通して自分が当事者になった場合を疑似体験してもらったり、ワークショップなどで問題解決のために具体的にどのような実践が可能なのかを検討してもらったり、する機会を提供することで、ミクロ・マクロ・リンク(社会的な想像力)を活性化していくアプローチを展開していく必要があると思われる。

謝辞

本稿で分析に使用したアンケート調査の実施、データの収集にあたり、平成24年度から25年度にかけて福井県立大学地域貢献研究の助成を受けた。本稿の取りまとめに関しても、平成29年度福井県立大学特別研究費〔C枠〕の助成を得ている。調査研究を進めていく上で、福井県総合政策部政策推進課、福井県健康福祉部長寿福祉課生きがい支援グループ、福井県健康福祉部地域福祉課地域健康福祉グループ、から適切なアドバイスをいただいた。アンケート調査の実施にあたっては、サンプリング作業に関して県内各市町の関係部署に、回答に関して一般住民の皆様にご協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

注

- 1) 福井県立大学ボランティア研究会が平成25年度に実施したアンケート調査で採用した分析枠組みの詳細については、福井県立大学ボランティア研究会(2014)を参照。データの実証的な分析に基づく分析枠組みの形成過程については、塚本(2011)に記載がある。
- 2) シニア層と他の年代とのボランティア活動参加の比較に関しては、塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子(2016a)を参照。
- 3) 住民基本台帳を抽出台帳として系統抽出法で実施した。
- 4) ボランティア活動に関する調査・研究では、ボランティア活動の定義が問題になる。今回の調査では、ボランティア活動に関して、一般に指摘されるミニマムの構成要素としての「公共性」、「自発性」、「非営利性」を前提とした定義を採用した。調査票の冒頭部分において、「「ボランティア活動」とは、自分の本来の仕事(家事や育児、介護、学業などを含む)とは別に、他人や社会のために、自分の時間や労力を、自発的に(なんらかの強制によるのではなく)、営利を目的とすることなく、提供する活動のことを指します」と定義を明示したうえで、回答を求めている。
- 5) どのセルが有意に寄与しているかの検討には残差分析が必要であるが、本稿の紀要論文という性格を考慮し、本文中にはクロス集計の結果をグラフ化したものを示す。調整後の残差に関しては、注に示す(以下同様)。

	過去1年間に参加経験あり	1年以前に参加経験あり	参加経験なし
非常に関心がある	4.20**	0.23	-4.31**
ある程度関心がある	-1.62	0.70	1.00
あまり関心がない	-3.72**	-1.70	5.08**
まったく関心がない	-1.72	-0.11	1.78

*: $P<0.05$, **: $P<0.01$ (以下の表でも同様)

6)

	参加したい	参加したくない
非常に関心がある	6.84**	-6.84**
ある程度関心がある	-2.64**	2.64**
あまり関心がない	-6.04**	6.04**
まったく関心がない	-2.42*	2.42*

7)

	過去1年間に参加経験あり	1年以前に参加経験あり	参加経験なし
満足している	-1.51	0.34	1.20
どちらかといえば満足している	0.56	-0.20	-0.38
どちらともいえない	-0.56	-0.81	1.23
どちらかといえば不満である	1.04	0.18	-1.17
不満である	-0.92	1.51	-0.36

8)

	参加したい	参加したくない
満足している	- 1.01	1.01
どちらかといえば満足している	0.51	- 0.51
どちらともいえない	- 2.55*	2.55*
どちらかといえば不満である	1.85	- 1.85
不満である	1.42	- 1.42

9)

	過去1年間に参加経験あり	1年以前に参加経験あり	参加経験なし
良い方向に向かっている	- 1.87	- 1.48	3.09**
どちらかといえば良い方向へ向かっている	0.76	- 0.81	- 0.06
どちらともいえない	- 1.78	- 0.32	2.03*
どちらかといえば悪い方向に向かっている	2.05*	0.78	- 2.67**
悪い方向に向かっている	0.00	1.70	- 1.43

10)

	参加したい	参加したくない
良い方向に向かっている	- 1.01	1.01
どちらかといえば良い方向へ向かっている	1.76	- 1.76
どちらともいえない	- 4.05**	4.05**
どちらかといえば悪い方向に向かっている	2.97**	- 2.97**
悪い方向に向かっている	0.95	- 0.95

11)

	過去1年間に参加経験あり	1年以前に参加経験あり	参加経験なし
そう思う	- 4.13**	- 2.77**	6.41**
どちらかといえばそう思う	- 5.35**	2.00*	3.60**
どちらともいえない	- 0.77	1.35	- 0.37
どちらかといえばそう思わない	4.88**	- 1.22	- 3.79**
そう思わない	5.05**	- 0.28	- 4.75**

12)

	参加したい	参加したくない
そう思う	- 5.41**	5.41**
どちらかといえばそう思う	- 4.07**	4.07**
どちらともいえない	- 2.06*	2.06*
どちらかといえばそう思わない	5.11**	- 5.11**
そう思わない	5.91**	- 5.91**

アクティブシニアのボランティア活動参加と社会問題への関心

13)

	過去1年間に参加経験あり	1年以前に参加経験あり	参加経験なし
そう思う	- 3.04**	- 0.46	3.39**
どちらかといえばそう思う	- 0.83	- 0.03	0.84
どちらともいえない	- 0.69	1.28	- 0.40
どちらかといえばそう思わない	2.22**	- 0.50	- 1.77
そう思わない	3.21**	- 0.19	- 3.00**

14)

	参加したい	参加したくない
そう思う	- 3.92**	3.92**
どちらかといえばそう思う	- 2.14*	2.14*
どちらともいえない	1.29	- 1.29
どちらかといえばそう思わない	3.04**	- 3.04**
そう思わない	3.02**	- 3.02**

15)

	過去1年間に参加経験あり	1年以前に参加経験あり	参加経験なし
そう思う	- 1.59	- 2.08*	3.32**
どちらかといえばそう思う	- 1.12	- 0.46	1.49
どちらともいえない	- 2.78**	0.87	2.00*
どちらかといえばそう思わない	- 2.08*	1.55	0.74
そう思わない	4.73**	- 1.13	- 3.71**

16)

	参加したい	参加したくない
そう思う	- 2.10*	2.10*
どちらかといえばそう思う	- 0.63	0.63
どちらともいえない	- 4.70**	4.70**
どちらかといえばそう思わない	- 0.20	0.20
そう思わない	4.44**	- 4.44**

17)

	過去1年間に参加経験あり	1年以前に参加経験あり	参加経験なし
そう思う	- 2.22*	- 1.42	3.39**
どちらかといえばそう思う	- 2.86**	- 1.82	4.35**
どちらともいえない	- 2.79**	1.01	1.90
どちらかといえばそう思わない	2.00*	1.18	- 2.97**
そう思わない	3.57**	- 0.03	- 3.49**

18)

	参加したい	参加したくない
そう思う	-4.14**	4.14**
どちらかといえばそう思う	-6.56**	6.56**
どちらともいえない	-3.89**	3.89**
どちらかといえばそう思わない	4.01**	-4.01**
そう思わない	6.29**	-6.29**

19)

	過去1年間に参加経験あり	1年以前に参加経験あり	参加経験なし
そう思う	-3.12**	-1.09	4.00**
どちらかといえばそう思う	-2.99**	-0.01	2.96**
どちらともいえない	-3.54**	0.14	3.38**
どちらかといえばそう思わない	3.70**	0.57	-4.13**
そう思わない	3.68**	-0.18	-3.48**

20)

	参加したい	参加したくない
そう思う	-4.63**	4.63**
どちらかといえばそう思う	-4.59**	4.59**
どちらともいえない	-4.12**	4.12**
どちらかといえばそう思わない	3.74**	-3.74**
そう思わない	6.31**	-6.31**

21)

	過去1年間に参加経験あり	1年以前に参加経験あり	参加経験なし
そう思う	-1.90	-1.05	2.76**
どちらかといえばそう思う	-3.04**	-0.29	3.25**
どちらともいえない	-1.06	0.62	0.52
どちらかといえばそう思わない	0.94	0.44	-1.30
そう思わない	2.73**	-0.38	-2.37**

22)

	参加したい	参加したくない
そう思う	-2.98**	2.98**
どちらかといえばそう思う	-3.66**	3.66**
どちらともいえない	-2.34*	2.34*
どちらかといえばそう思わない	1.23	-1.23
そう思わない	4.47**	-4.47**

アクティブシニアのボランティア活動参加と社会問題への関心

23)

	過去1年間に参加経験あり	1年以前に参加経験あり	参加経験なし
そう思う	- 3.44**	- 0.07	3.46**
どちらかといえばそう思う	- 1.19	- 0.60	1.68
どちらともいえない	- 0.28	1.44	- 0.95
どちらかといえばそう思わない	1.45	0.03	- 1.46
そう思わない	3.03**	- 1.15	- 2.02*

24)

	参加したい	参加したくない
そう思う	- 3.80**	3.80**
どちらかといえばそう思う	- 1.79	1.79
どちらともいえない	- 0.52	0.52
どちらかといえばそう思わない	1.02	- 1.02
そう思わない	4.74**	- 4.74**

25)

	過去1年間に参加経験あり	1年以前に参加経験あり	参加経験なし
そう思う	- 0.55	- 0.66	1.09
どちらかといえばそう思う	0.01	- 0.34	0.27
どちらともいえない	- 0.62	0.77	- 0.03
どちらかといえばそう思わない	0.70	0.70	- 1.28
そう思わない	1.65	- 0.15	- 1.50

26)

	参加したい	参加したくない
そう思う	1.08	- 1.08
どちらかといえばそう思う	0.57	- 0.57
どちらともいえない	- 2.49*	2.49*
どちらかといえばそう思わない	- 0.83	0.83
そう思わない	2.40*	- 2.40*

27)

	過去1年間に参加経験あり	1年以前に参加経験あり	参加経験なし
そう思う	- 2.96**	- 0.10	3.00**
どちらかといえばそう思う	0.25	- 0.79	0.42
どちらともいえない	- 0.03	0.23	- 0.16
どちらかといえばそう思わない	1.06	1.53	- 2.32*
そう思わない	0.62	- 1.08	0.29

28)

	参加したい	参加したくない
そう思う	- 1.41	1.41
どちらかといえばそう思う	- 0.16	0.16
どちらともいえない	- 1.18	1.18
どちらかといえばそう思わない	0.48	- 0.48
そう思わない	2.09*	- 2.09*

29)

	過去1年間に参加経験あり	1年以前に参加経験あり	参加経験なし
そう思う	0.84	- 0.63	- 0.29
どちらかといえばそう思う	- 0.13	0.15	0.00
どちらともいえない	- 2.40*	0.50	1.95
どちらかといえばそう思わない	0.34	1.42	- 1.54
そう思わない	1.96*	- 0.94	- 1.14

30)

	参加したい	参加したくない
そう思う	2.36*	- 2.36*
どちらかといえばそう思う	- 0.35	0.35
どちらともいえない	- 4.56**	4.56**
どちらかといえばそう思わない	0.59	- 0.59
そう思わない	2.01*	- 2.01*

31)

	過去1年間に参加経験あり	1年以前に参加経験あり	参加経験なし
そう思う	- 1.74	0.48	1.31
どちらかといえばそう思う	1.96*	- 1.19	- 0.93
どちらともいえない	0.16	0.34	- 0.45
どちらかといえばそう思わない	- 0.76	1.17	- 0.23*
そう思わない	0.04	- 0.62	0.49

32)

	参加したい	参加したくない
そう思う	0.09	- 0.09
どちらかといえばそう思う	- 0.93	0.93
どちらともいえない	0.96	- 0.96
どちらかといえばそう思わない	0.52	- 0.52
そう思わない	- 0.78	0.78

33)

	過去1年間に参加経験あり	1年以前に参加経験あり	参加経験なし
クラスター 1	3.59**	- 0.73	- 2.94**
クラスター 2	2.28*	0.72	- 2.86**
クラスター 3	- 2.25*	1.02	1.37
クラスター 4	- 4.03**	- 1.16	4.98**

34)

	参加したい	参加したくない
クラスター 1	4.10**	- 4.10**
クラスター 2	2.75**	- 2.75**
クラスター 3	- 1.71	1.71
クラスター 4	- 5.77**	5.77**

参考文献

- 跡田直澄・福重元嗣 (2000) 「中高年のボランティア活動への参加構造-アンケート調査個票に基づく要因分析」『季刊・社会保障研究』36-2: 246-255
- 藤原佳典・西真理子・渡辺直紀・李相侖・井上かず子・吉田裕人・佐久間尚子・呉田陽一・石井賢二・内田勇人・角野文彦・新開省二 (2006) 「都市高齢者による世代間交流型ヘルスプロモーションプログラム-“REPRINTS”の1年の歩みと短期的効果-」『日本公衛誌』53-9: 702-714
- 藤原佳典・杉原陽子・新開省二 (2005) 「ボランティア活動が高齢者の心身の健康に及ぼす影響-地域保健福祉における高齢者ボランティアの意義」『日本公衛誌』52-4: 293-307
- 福井県立大学ボランティア研究会【塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・小林明子】(2014) 『アクティブシニアのボランティア活動参加に関する研究』福井県立大学地域貢献研究・平成24～25年度調査研究報告書
- 舟木紳介・塚本利幸・橋本直子・永井裕子 (2017) 「アクティブシニアのICT利用とボランティア活動-福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から3-」『福井県立大学論集』49: 1-14
- 広瀬幸雄 (1995) 『環境と消費の社会心理学——私益と共益のジレンマ』名古屋大学出版会
- 金貞任・新開省二・熊谷修・藤原佳典・吉田祐子・天野秀紀・鈴木隆雄 (2004) 「地域中高年者の社会参加の現状とその関連要因-埼玉県鳩山町の調査から-」『日本公衛誌』51-5: 322-334
- 馬欣欣 (2014) 「高齢者におけるボランティア供給の決定要因に関する実証分析」『日本労働研究雑誌』643: 70-80
- 三谷はるよ (2016) 『ボランティアを生みだすもの 利他の計量社会学』有斐閣
- 望月七重・李政元・包敏 (2002) 「高齢者のボランティア活動(参加・継続意向)に影響を与える要因-高齢者大学の社会還元活動実態調査から-」『社会学部紀要』(関西学院大学)91: 181-193
- 野中久美子・村山陽・倉岡正高・藤原佳典 (2013) 『高齢者による社会参加や生涯学習活動における継続支援プログラムの開発』平成24年度「社会教育による地域の教育力強化プロジェクト」における実証的共同研究調査報告書
- 桜井政成 (2002) 「複数動機アプローチによるボランティア参加動機構造の分析-京都市域のボランティアを対象とした調査より-」『ノンプロフィット・レビュー』(日本NPO学会)2-2: 111-122
- 桜井政成 (2005) 「ライフサイクルからみたボランティア活動継続要因の差異」『ノンプロフィット・レビュー』(日本NPO学会)5-2: 103-113

- 島貫秀樹・本田春彦・伊藤常久・河西敏幸・高戸仁郎・坂本譲・犬塚剛・伊藤弓月・荒山直子・植木章三・芳賀博(2007)「地域在住高齢者の介護予防推進ボランティア活動と社会・身体的健康およびQOLとの関係」『日本公衛誌』54-11: 749-759
- 総務省(2010)『平成22年度情報通信白書』
<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h22/>(2014.2.5参照)
- 総務省(2013)『ICT超高齢社会構想会議報告書』
http://www.soumu.go.jp/nemu_news/01ryutsu02_02000069.html(2014.2.5参照)
- 塚本利幸(2011)「福井県における社会活動参加の現状と課題」『ふくい地域経済研究』13: 43-60
- 塚本利幸(2012)「ボランティア活動参加とジェンダー」『日本ジェンダー研究』15: 65-79
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子(2016a)「アクティブシニアのボランティア活動参加と基本属性-福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から1-」『福井県立大学論集』47: 19-43
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子(2016b)「アクティブシニアのボランティア活動の参加の様態-福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から2-」『福井県立大学論集』47: 45-73
- 塚本利幸・舟木紳介・橋本直子・永井裕子(2017)「アクティブシニアのボランティア活動参加と社会関係資本-福井県で実施したアンケート調査のデータ分析から4-」『福井県立大学論集』49: 15-44
- 塚本利幸・小林明子・酒井美和(2013)「混住化地域の近隣関係における互酬性-福井市の事例から-」『福井県立大学論集』41: 13-38
- 塚本利幸・霜浦森平・山添史郎・野田浩資(2002)「環境ボランティア活動への参加と生活経験」『福井県立大学論集』21: 39-55
- 塚本利幸・霜浦森平・山添史郎・野田浩資(2004)「環境ボランティア活動の多様性と参加の規程要因-参加意欲と参加経験のギャップをめぐって-」『福井県立大学論集』23: 73-90
- 塚本利幸・霜浦森平・山添史郎・野田浩資(2012)「ボランティア活動参加と地域活動参加,近隣交際との関連についての考察-福井市の事例から-」『ふくい地域経済研究』15: 15-36
- 山添史郎・霜浦森平・塚本利幸・野田浩資(2012a)「地域環境保全活動への参加と社会関係資本-滋賀県守山市のNPO法人「びわこ豊穡の郷」を事例にして-」『環境社会学研究』18: 155-166
- 山添史郎・霜浦森平・塚本利幸・野田浩資(2012b)「地域環境NPOの会員の年齢層と参加の様態-滋賀県守山市のNPO法人「びわこ豊穡の郷」を事例として」『京都府立大学学術報告(公共政策)』4: 73-88
- 山添史郎・霜浦森平・塚本利幸・野田浩資(2015)「地域環境NPO会員の社会関係資本と参加の様態-NPO法人「びわこ豊穡の郷」の会員構成の変化をめぐって」『水資源・環境研究』28-2: 149-158
- 山添史郎・塚本利幸・霜浦森平・野田浩資(2017)「地域環境NPOの展開プロセスと参加層の変化-NPO法人「びわこ豊穡の郷」の会員アンケート調査の3時点比較-」『水資源・環境研究』30-2: 66-72
- 山添史郎・塚本利幸・霜浦森平・野田浩資(2017)「地域環境NPOにおける社会運動性と事業性-NPO法人「びわこ豊穡の郷」の展開プロセスと会員の参加の様態をめぐって-」『京都府立大学学術報告.公共政策』9: 39-58